



日本全国から集まった志ある葬儀社の人たちに向けて
思いを語る三村麻子さん

十人いれば十通りの別れの形がある

「葬儀」は人生の交差点 第二章へつなぐ豊かな時間に

CHAPTER・ツー

葬儀とは何のためにあるのか。十人
いれば十通りの葬儀が存在するはずだ。

「最愛の人」と過ごす最後の時間が豊か
であれば、それからの人生を歩む大きな
力になると考えて「葬儀の可能性」を追
求している人がいる。亀戸の閑静な住宅
街で邸宅型の貸しセレモニーホール「D
EAR」を運営する三村麻子さんである。

ある夏の日、「DEAR」のホールで
葬儀社向けの「無宗教の家族葬」の研修
が行われた。参加者は3グループに分か
れてミーティングを行い、それぞれの家
族葬を演出した。単に「趣向を凝らす」
のではなく、哀しみの中にある遺族や友
人たちの心に寄り添い、故人とのお別れ
にいかに向き合えるか、その最善のスタ
イルを追求しようという心意気に溢れた
模擬式ばかりだった。

「心ある葬儀社さんたちとタッグを組ん
で、前例がないような葬儀スタイルでも
実現できるのだという事を示していきたく
いです」と三村さんは語る。

「無宗教式を望む方は増えていきます。完
全に無宗教にする事もできますし、1部
にお寺さんをお呼びして、2部は無宗教
に作り込む事もできる。一番問題なの
は、柔軟性のない葬儀社が『このスタイ
ルで』と、遺族の想いを汲み取ろうともし
ずに押し付けてしまう現状にあります」

三村さんは自らをエンディング・ナビ
ゲーターと呼ぶ。単に葬儀をプロデュ
スするだけではなく、「葬儀」をキーワー
ドに、その人の生き方、終わり方に寄り
添ってアドバイスを行っているからだ。
「誰でも、自分の人生の幕引きをする時
が来る。それが第一章だとしたら、残さ



セレモニーホール「DEAR」で行われた「無宗教の家族葬」
の模擬葬儀。式の進行スタイル、故人を偲ぶ飾りつけ、
設営などに「別れ」への寄り添いのまなざしがある

れた人の中に自分自身が受け継がれてい
くのが第二章。葬儀はその出発点ではな
いでしょうか。確かに自分の幕引きを考
えるは辛い事ですが、いつか来る幕引き
の時を見据えればこそ、今を大事に生き
られる。第二章に希望を託せるのではな
いでしょうか」

「息子の友人達が、棺の中の私を見つめ
ながら『三村のお袋さんには、よくメシ
を喰わせてもらったよな』って息子と一
緒に思い出してくれたら満足。余韻の残
るような幕引きをしたいですね」と、三
村さんは自身の葬儀の理想をそう語って
微笑んだ。亡くなる人を見つめ、受け取っ
たものに思いを馳せて、亡くなった人の
思いとともに第二章を歩んで行く。人間
が変わらず続けて来た営みである。